

コーパスを用いた 仮定形における音融合使用と 印象評定に関する研究

入江 さやか（同志社大学大学院後期課程）
金 明哲（同志社大学文化情報学部）

目次

- 1 はじめに
- 2 先行研究
- 3 研究目的
- 4 研究方法
- 5 分析結果
- 6 おわりに
参考文献

1 はじめに

- 音融合とは
- 「縮約形」・「音変化」などと呼ばれる現象
- 二つ以上の単位が音の転訛などによって一つになったもの
- 話し言葉の特徴
- 本発表では、観察される現象をすべて含めた用語として「音融合」を使用

2 先行研究 (1/6)

- 従来 of 音融合に関する研究
- 音融合の網羅的な記述

- 土岐 (1975) , 石井 (1984) , 立松 (1986) , 堀口 (1989) , 丸山 (1989) (1990) , 斎藤 (1991) , 韓 (1991) , 川瀬 (1992) , 中島 (1993) , 嶺岸 (1999) , 栗原 (2000) , 朱 (2000) , 土岐 (2002) , 中村ら (2003) , 福島・上原 (2004) , 上原・福島 (2005) , ボイクマン (2010) , 高橋 (2012)

2 先行研究 (2/6)

- 問題の所在 : 音融合の多様性
- 岡田 (2006)
先行研究において多様性については見解が一致。
- 土岐 (1975)
一般的に音融合は「インフォーマルな場面に於いて、早く話す時に使われる」と言われていることに着目し、分析。正式な場面でも音融合は使用され、速度とも関係ないことを指摘
- 上原・福島 (2005)
「かなり丁寧なレベルでもごく普通に使われるものからほとんど使われないレベルのものまで様々なレベルのものがあること」を指摘

2 先行研究 (3/6)

- ・石井 (1984)

「音融合ないし音訛の可能性は、諸方面に殆んど際限ないもののごとくでありながら、なほ、或る種の音連鎖ないし形態連鎖なりに偏るとも見え、また或る場面なり人物なりに偏るとも見える」

2 先行研究 (4/6)

- 従来の主な調査対象は、テレビ番組やラジオ番組の音声（土岐 1975, 丸山 1989, 1990, 堀口 1989）
- 談話を対象とした研究もある（石井 1984, 中島1993）が協力者が数人でデータ量が十分とは言えない。
- 音融合には種々の現象が含まれる。現象ごとに計量的に分析する必要がある
- コーパスを使用して「～デハ」が「～ジャ」となる音融合の生起率は非常に高いこと、話す速度とは関係がないこと、「講演の自発性」と「発話スタイル」に関する評定値との関連を計量的に示した（前川 2002）

2 先行研究 (5/6)

- ・ 仮定形の音融合についての計量的研究 (堀口1989)

助動詞の「ナイ」または、形容詞の仮定形の音縮約が72%の生起率であること、「動詞+バ」の音縮約である「飲メバ」が「飲ミヤ」となる音融合の生起率は5%と低いことを示した。

- ・ 上原・福島 (2005) で、動詞・形容詞仮定形音融合の生起率が低いことを示しているが用例が少なく、確かなことは言いにくいとしている。

- ・ 動詞仮定形の音融合は、丁寧体基調の話し言葉においては、あまり使用が認められなくても、インフォーマルな場では使用される可能性が高いことも考えられる。

2 先行研究 (6/6)

- 音融合の使用状況について場面別・性別・年代別にみる必要がある
- 話し相手別 (石井 1984)
- 性別 (丸山 1990)
- 年代別 (中島 1993)
- データ量が十分ではない
- 動詞仮定形の音融合については, 中島 (1993) にわずかな記述があるのみ。用例は少ない。

3 研究目的

- すべての活用語の仮定形における音融合の使用実態について、コーパスを使用し、様々な場面での話し言葉を対象として、使用場面別、性別、年代別における差異を計量的に明らかにすることを目的とする
- 『日本語話し言葉コーパス（以降はCSJ）』 ※非コア含む
（国立国語研究所 2006）
『名大会話コーパス（名大C）』 （藤村他 2011）
『日本語日常会話コーパスモニター公開版（CEJC）』
（小磯他2018）
- 音融合使用が、どのような印象を与えるのかについて、『CSJ』の印象評定データから分析する



4 研究方法

4.1 研究方法

- 「中納言」を使用 短単位検索
- 「活用形」の「小分類」が「仮定形-融合」のものを抽出

キー：活用形="仮定形-融合"

キー：(活用形="仮定形-一般" AND 品詞 LIKE "形容詞-一般%")

- コーパス別、性別、年代別にカイ二乗検定で独立性の検定を行った後、個別の項目の差をみるために残差分析（調整済み残差）を行う
- 分析結果と『CSJ』の印象評定との関係を考察する

4.1.1 調整済み残差

鄭・金 (2011) 『社会調査データ解析』

- カイ二乗検定で独立でないと言えたとき, 調整済み残差を用いて残差分析を行う
- 調整済み残差 d_{ij} は, 期待度数 E_{ij} , 横周辺和 r_i , 縦周辺和 c_i , 総数 n_i と観測値 f_{ij} を用いて次の式で表される

$$d_{ij} = \frac{f_{ij} - E_{ij}}{\sqrt{E_{ij} \left(1 - \frac{r_i}{n_i}\right) \left(1 - \frac{c_i}{n_i}\right)}}$$

4.1.1 調整済み残差

- 有意水準を0.05とするなら、調整済み残差が1.96より大きな値をとれば、独立な状態で期待されるよりも多くの度数が集中していると判断できる（プロットでは上向きに青で示す）
- 逆に調整済み残差が-1.96より小さい値をとれば、独立の状態で期待されるよりも、かなり少ない度数しか現れていないといえる（プロットでは下向きに赤で示す）

4.2 コーパスの概要

表1 コーパスの概要

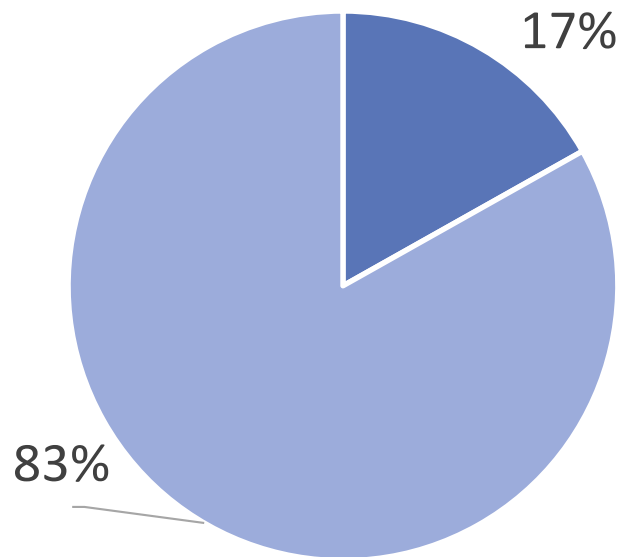
コーパス	制作	女性	男性	年代	内容	時間
CSJ学会 講演(A)	1999- 2003	138	681	10~80	種々の学会におけるライブ録音	274.4
CSJ模擬 講演(S)	1999- 2003	331	263	10~80	一般話者による日常的话题についての講演	329.9
CSJ対話 (D)	1999- 2003	8	8	40~ 70	学会講演および模擬講演に関して演者になされたインタビュー、インタビューと同一ペアによる課題指向対話および自由対話	12.2
名大C	2001- 2003	160	37	10~90	雑談中心	100
CEJC モニター 公開版	2016	131	108	20~90	多様な場面での自然に生じる会話、映像も含まれる	50

4.2.1 『CSJ』 (1/4)

- 国立国語研究所編 (2006)
- プロジェクトの重要な目的のひとつは、自発音声を自動認識できる次世代音声認識システムの開発
- 現代日本語の話し言葉の全体像をバランスよく反映した近郊コーパスを設計することが望まれるが、目的上、多くのジャンルを設定していない。
- 独話 (モノローグ) を集中的に収集、学会講演と模擬講演が全体の約90%を占める。

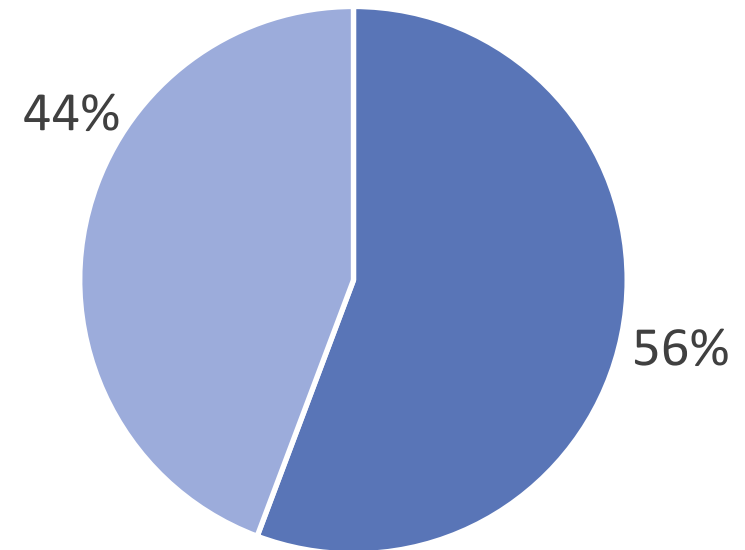
4.2.1 『CSJ』 (2/4)

学会講演 (A)



■ 女性 ■ 男性

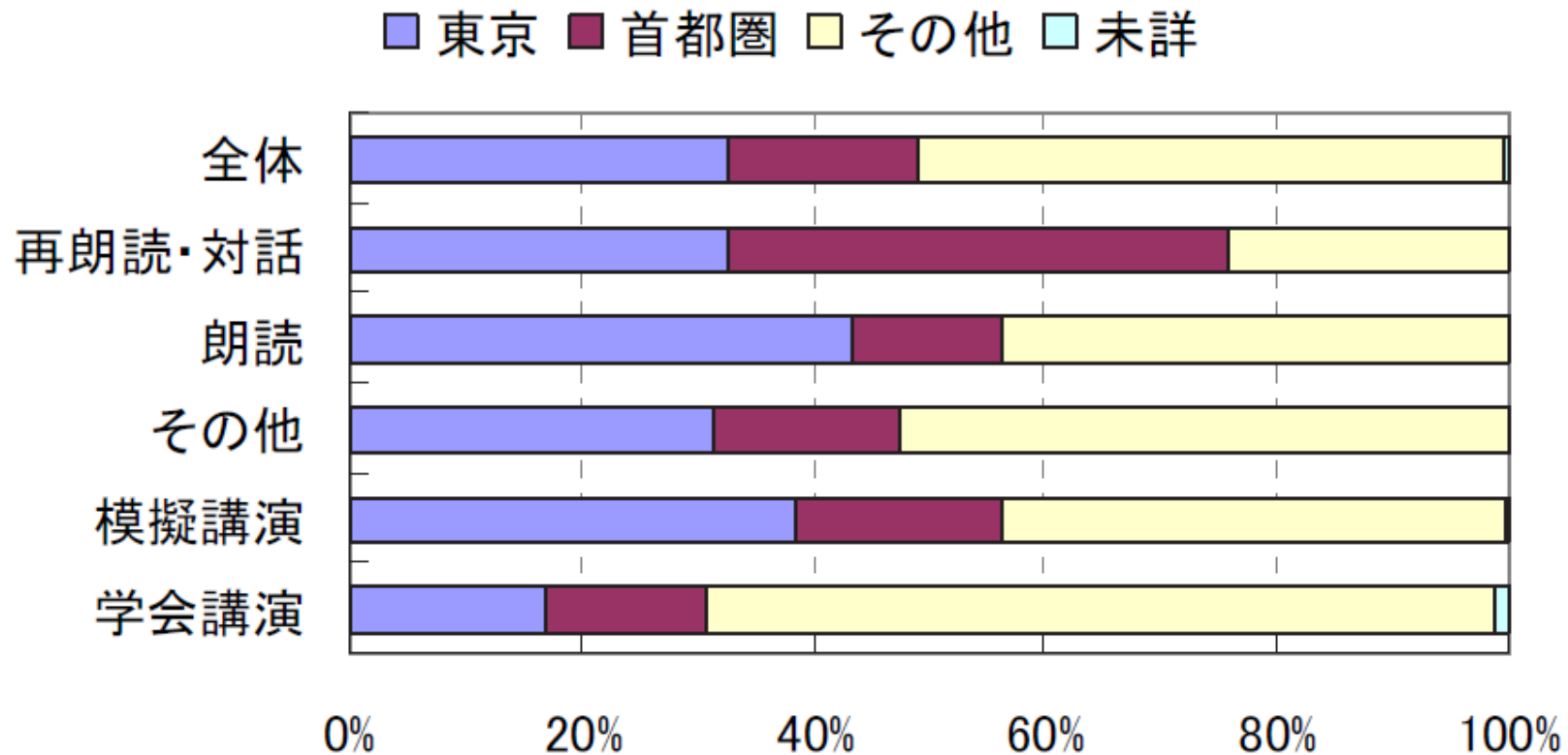
模擬講演 (S)



■ 女性 ■ 男性

4.2.1 『CSJ』 (3/4)

国立国語研究所編 (2006)



話者の出生地の分布(延べ)

4.2.1 『CSJ』 (4/4)

表2 音声のタイプと時間 国立国語研究所編 (2006)

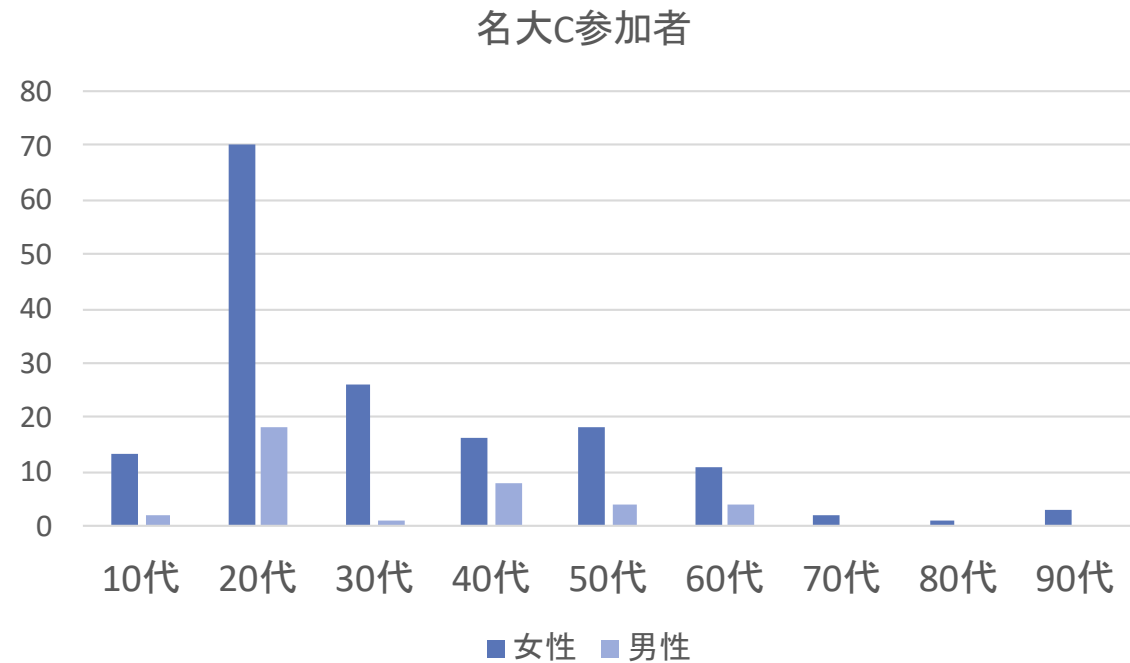
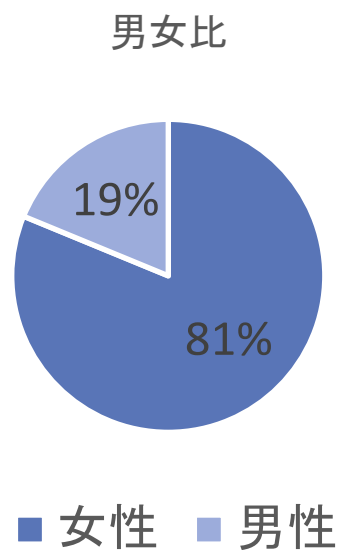
音声のタイプ	タイプ	話者数 (異なり)	講演数	時間
学会講演	独話	819	987	274.4
模擬講演	独話	(注) **594	1715	329.9
学会講演インタビュー	対話	*(10)	10	2.1
模擬講演インタビュー	対話	*(16)	16	3.4
課題指向対話	対話	*(16)	16	3.1
自由対話	対話	*(16)	16	3.6

4.2.2 『名大会話コーパス』(1/4)

- 名大C
- 2001年～2003年の間に収録
- 名古屋大学の教員と大学院生（日本語学・日本語教育学を専攻）が中心となって構築
- 日本語母語話者による約100時間の自然会話コーパス
- 2009年8月より国立国語研究所HPで公開
- 雑談が中心
- 名古屋近辺で収録されたものが多く、関西の方言も出てくるが、ほぼ共通語に近い話し方をしている

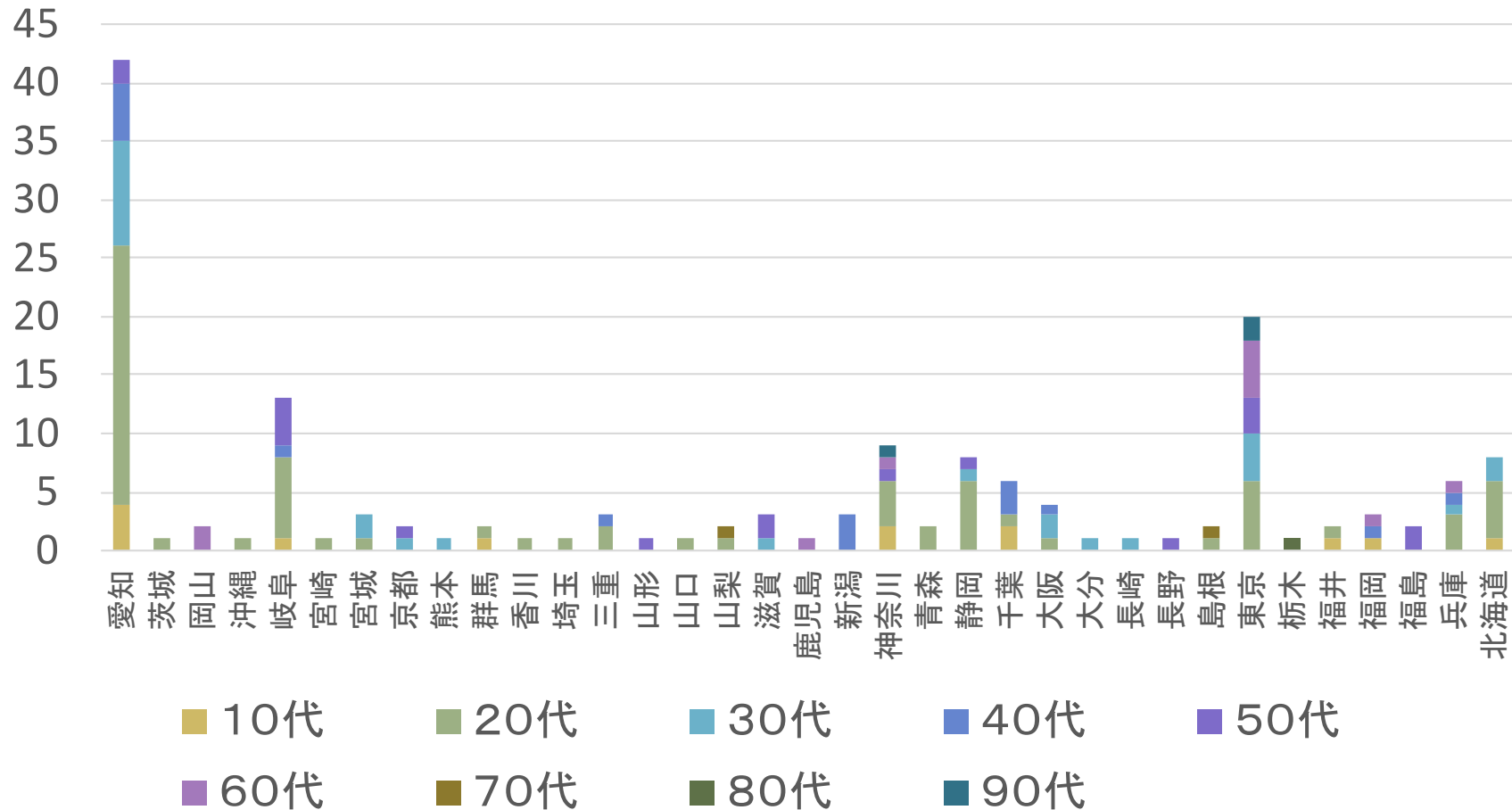
4.2.2 『名大会話コーパス』(2/4)

- 名大C



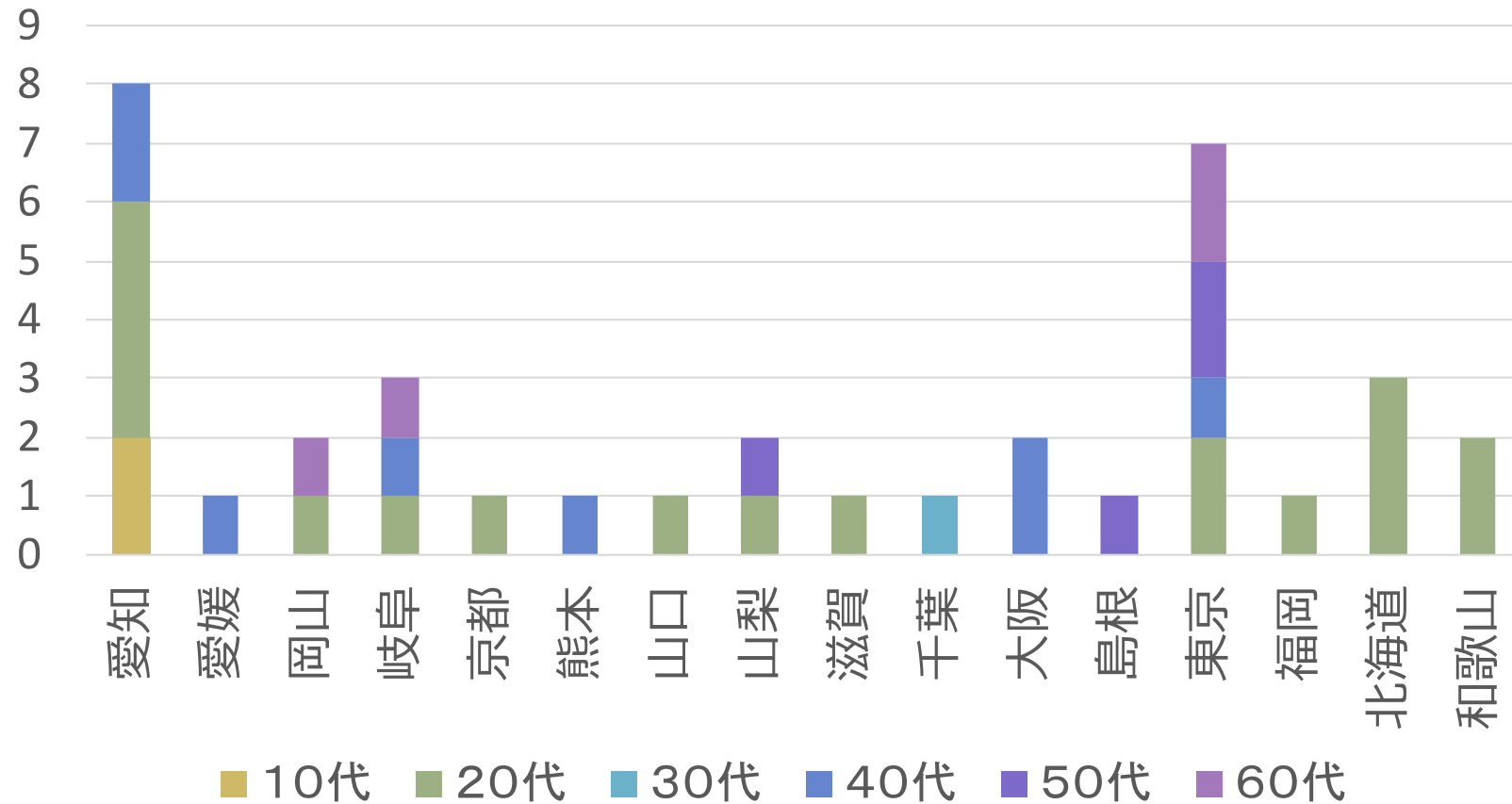
4.2.2 『名大会話コーパス』 (3/4)

女性出生地別



4.2.2 『名大会話コーパス』 (4/4)

男性出生地別



4.2.2 『CEJC』モニター公開版 (1/3)

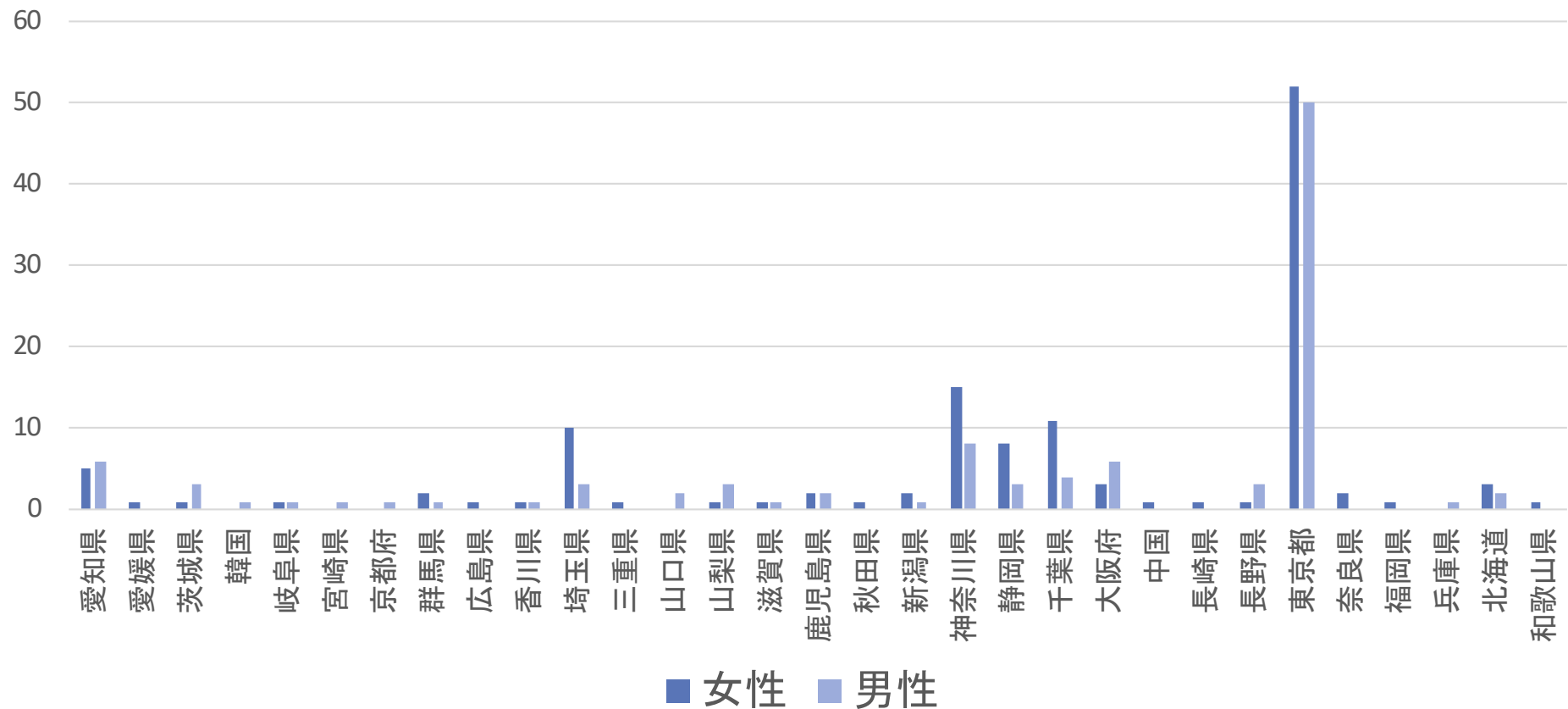
- 従来の話し言葉コーパスと異なり、日常会話の多用な場面で生じる会話を収録
- 日常生活において自然に生じる活動を収録するために、調査者が収録に介入しない個人密着法と呼ばれる収録法がとられている。
- CEJCは一般の人である調査協力者が自ら機材を用いて映像・音声を含む収録を主軸に構築するという新しい試みである。(田中他 2018)
- モニター版では、40名の協力者のうち、20名の協力者が収録したデータを公開(小磯他2018)

4.2.2 『CEJC』モニター公開版 (2/3)

- 小磯他 (2018)
- 延べ、異なりとともに、女性に関しては 40 代・50 代が多く 60 代・70 代が少ない傾向が見られる。
- CEJC では多様な会話をバランスよく集めるために、会話行動調査を行っている。多様な場面の収録ができているが、職場や学校における仕事・学業中の会話が少ない。個人密着法では、この種の会話の収録が難しいためである。

4.2.2 『CEJC』モニター公開版 (3/3)

CEJC話者出生地別



4.3 仮定形の音融合 (1/4)

① 助動詞「ない」

- (1) 高くなきゃいいけど (もとの形：なければ)
- (2) 悪い人になってなけりゃいいんだけど
(もとの形：なければ)

② 「ない」以外の助動詞 「ぬ・れる・たい・てる…」

- (3) それは払わな／な (もとの形：払わぬば, 「ぬ」)
- (4) やってりゃうまくなるよ
(もとの形：やって (い) れば, 「てる」)

4.3 仮定形の音融合 (2/4)

③ 形容詞非自立可能「ない・よい・ほしい」

(5) 発売前でなきゃ (もとの形：なければ)

(6) うそでなけりゃ (もとの形：なければ)

④ 形容詞一般

(7) 味がうまきゃいいよ (もとの形：うまければ)

(8) 近けりゃ行くよ (もとの形：近ければ)

4.3 仮定形の音融合 (3/4)

⑤ 動詞非自立可能

「する, なる, ある,
いる, いく, くる…」

⑥ 動詞一般

表3 仮定形の音融合

動詞	音融合	もとの形
言う	言 <u>や</u>	言 <u>え</u> ば
書く	書 <u>き</u> や	書 <u>け</u> ば
足す	足 <u>し</u> や	足 <u>せ</u> ば
待つ	待 <u>ち</u> や	待 <u>て</u> ば
死ぬ	死 <u>に</u> や	死 <u>ね</u> ば
飲む	飲 <u>み</u> や	飲 <u>め</u> ば
降る	降 <u>り</u> や	降 <u>れ</u> ば
泳ぐ	泳 <u>ぎ</u> や	泳 <u>げ</u> ば
飛ぶ	飛 <u>び</u> や	飛 <u>べ</u> ば

4.3 仮定形の音融合 (4/4)

- 小椋 (2006) により, 音融合は元の形に戻さず, 融合した単語連続で1単位とするため, 以下のような助動詞を認定
 - 「てる」 (「ている」の融合)
 - 「てらっしゃる」 (「ていらっしゃる」の融合)
 - 「てく」 (「ていく」の融合)
 - 「とく」 (「ておく」の融合)
 - 「とる」 (「ておる」の融合)
 - 「ちまう・ちゃう」 (「てしまう」の融合)
 - 「たげる」 (「てあげる」の融合)
 - 「たる」 (「てやる」の融合)
 - 「つう (つつう・(っ)ちゅう) ・ってえ」 (「という」の融合)



5 分析結果



5.1 コーパス差・性差

5.1 コーパス差・性差 (1/3)

表4 各コーパスにおける性別音融合使用度数

	助動詞「ない」 +ば	ない以外の 助動詞 +ば	動詞 +ば	動詞非 自立 +ば	形容詞非 自立+ば	形容詞+ ば	合計
CSJ女性	396	4	0	4	20	1	425
CSJ男性	831	37	20	50	29	10	977
名大C女性	511	86	27	38	34	3	699
名大C男性	68	37	14	26	8	1	154
CEJC女性	128	11	8	4	6	1	158
CEJC男性	100	32	26	28	8	2	196
合計	2129	226	101	159	110	18	2737

全体の77.8%

わずか0.7%

5.1 コーパス差・性差 (2/3)

- 「形容詞+ば」の音融合が非常に少ない
- CSJの例
- 短けりゃ短い程 3例 (A01M0573, 40-44歳)
- 短けりゃ短ければ 1例 (S04F0889, 40-44歳)
- 安きゃいい 3例 (S04M0206, 55-59歳)
- 安きゃ次のところ変えて 1例 (S04M0206, 55-59歳)
- 長けりゃ遅く動いたように見える
1例 (A01M0573, 40-44歳)
- 面白けりゃなどの縮約形を共時的に還元できる限り
1例 (A11M0187, 30-34歳)
- 悪けりゃ悪いでそれまた結構ということだね
1例 (S04M0869, 60-64歳)

A: 学会講演

S: 模擬講演

M: 男性

F: 女性

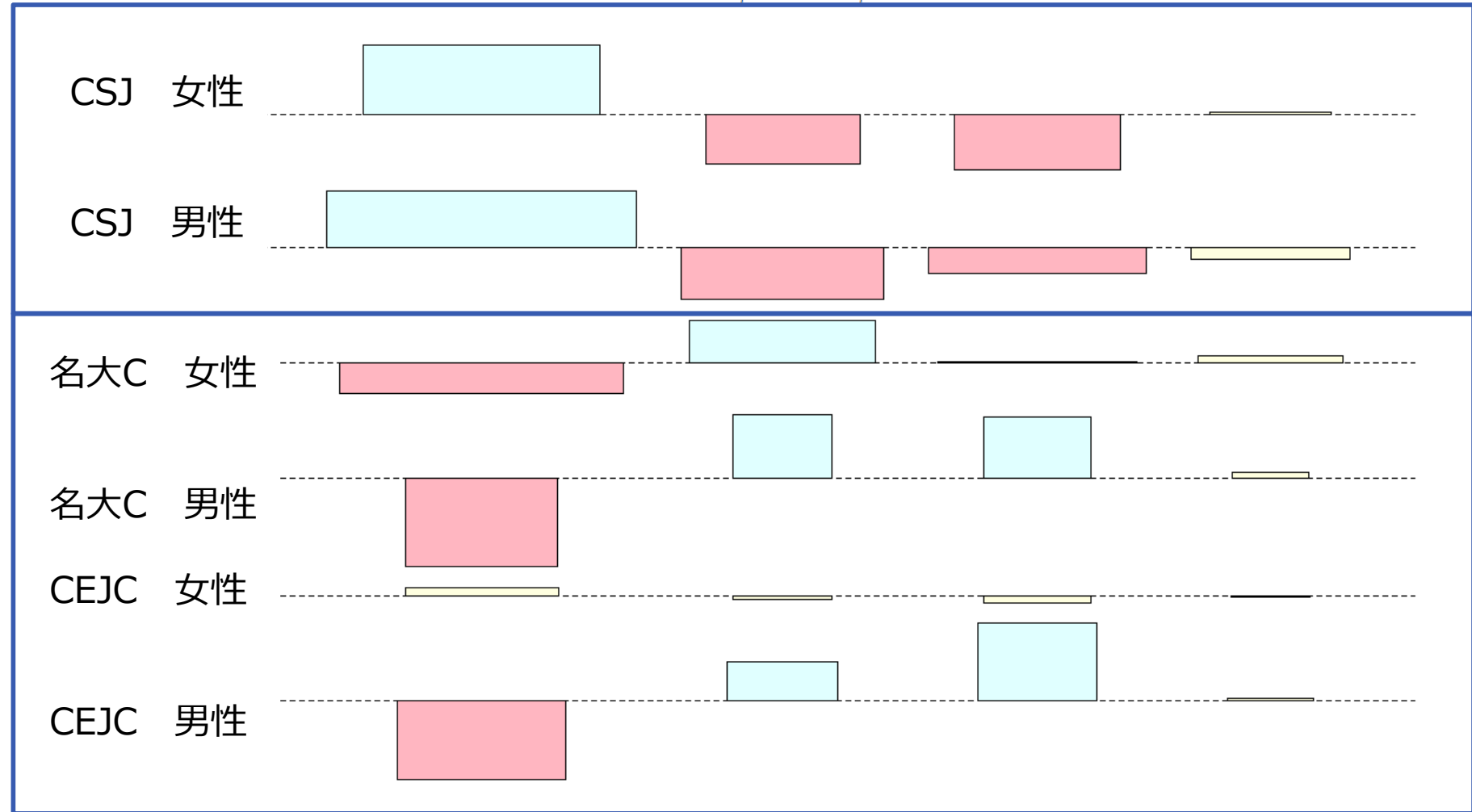
※同一人物が一つの講演で複数回使用。

5.1 コーパス差・性差 (3/3)

- 「形容詞+ば」の音融合の例が少ないため、「形容詞一般+ば」と合わせる
- 「動詞一般+ば」と「動詞非自立可能+ば」を分ける必要性がないと考え、動詞も一つにまとめる

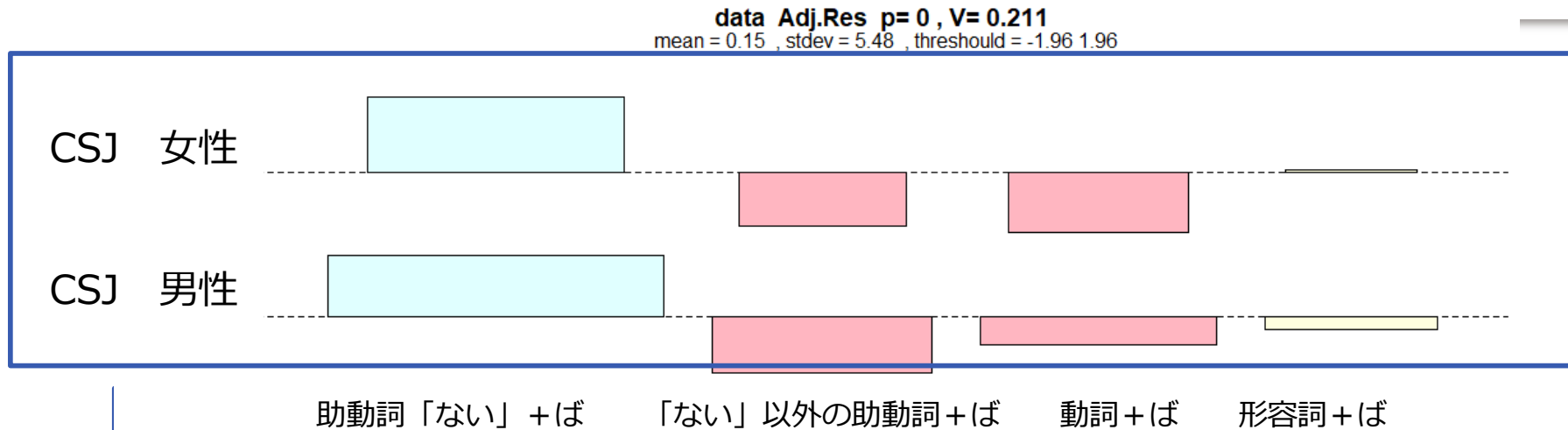
5.1.1 コーパス差 (1/3)

data Adj.Res p= 0 , V= 0.211
mean = 0.15 , stdev = 5.48 , threshold = -1.96 1.96



助動詞「ない」+ば 「ない」以外の助動詞+ば 動詞+ば 形容詞+ば

5.1.1 コーパス差 (2/3)



『CSJ』においては、

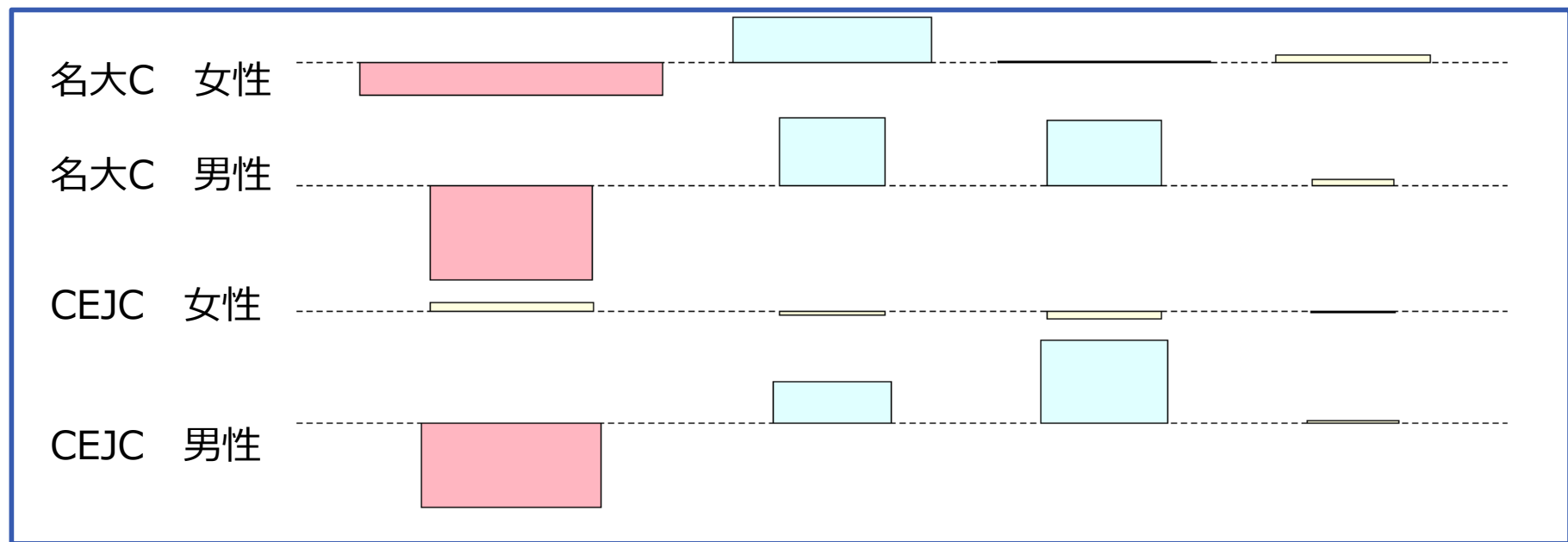
男女とも「助動詞ない+ば」の音融合をよく使用
→フォーマルな場で使用

「ない以外の助動詞+ば」「動詞+ば」は使用されない
→フォーマルな場では不向き

5.1.1 コーパス差 (3/3)

data Adj.Res p= 0 , V= 0.211
mean = 0.15 , stdev = 5.48 , threshold = -1.96 1.96

『名大C』 『CEJC』 は似た傾向で, 『CSJ』 とは逆
→インフォーマルな自然談話を集めたコーパスの特徴



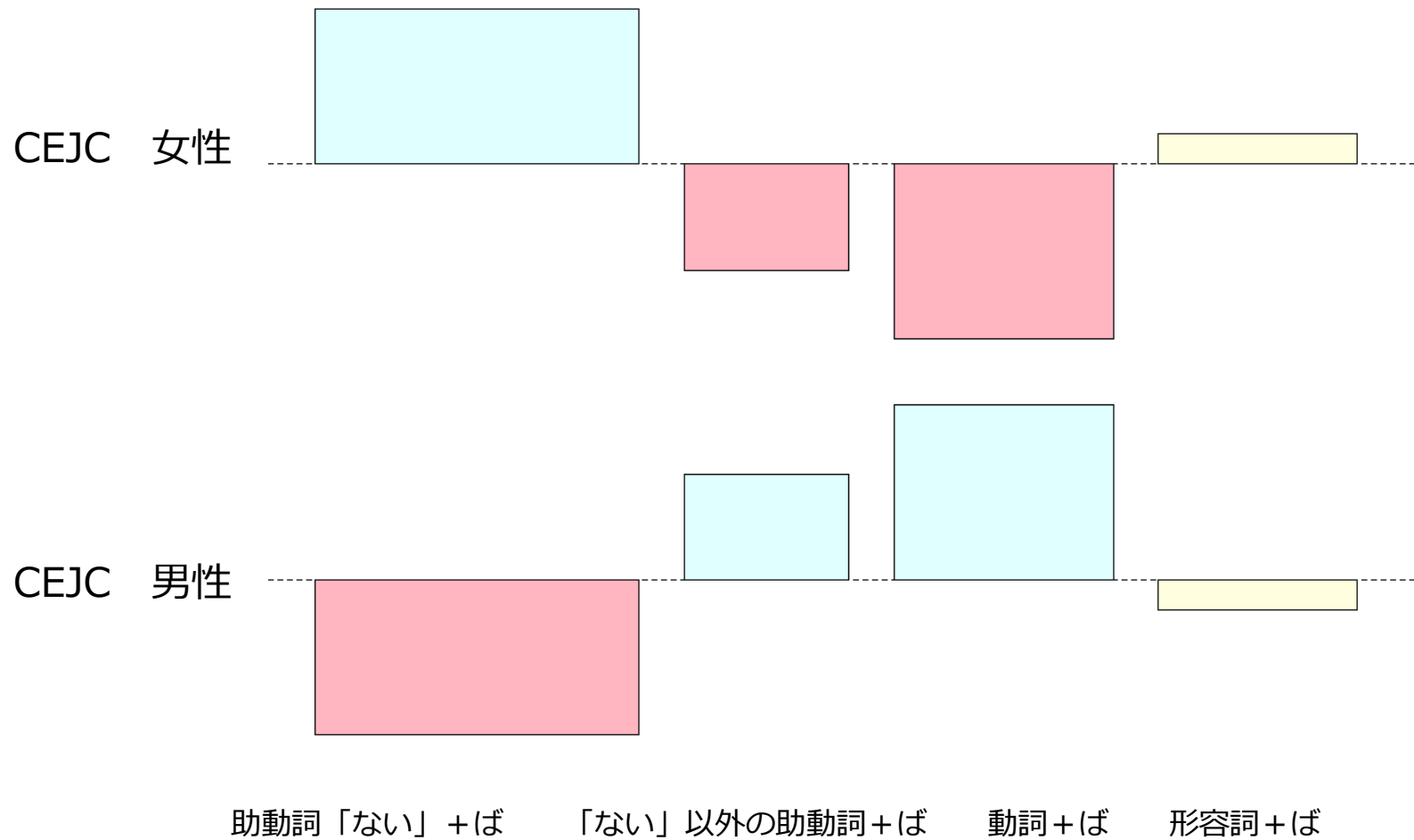
助動詞「ない」+ば 「ない」以外の助動詞+ば 動詞+ば 形容詞+ば



5.1.2 コーパス別

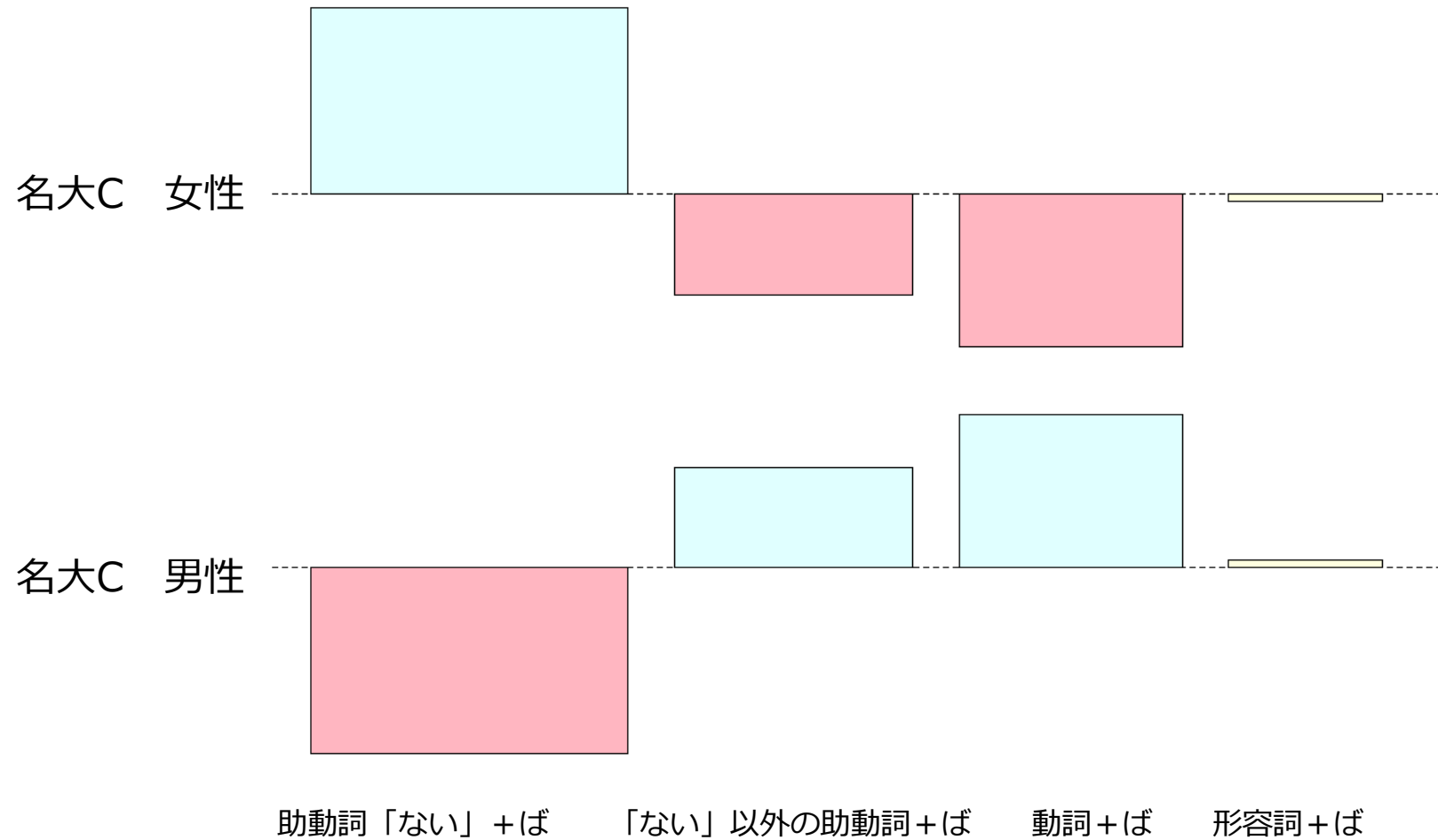
5.1.2 『CSJ』における性差

data4 Adj.Res p= 0 , V= 0.153
mean = 0 , stdev = 3.78 , threshold = -1.96 1.96



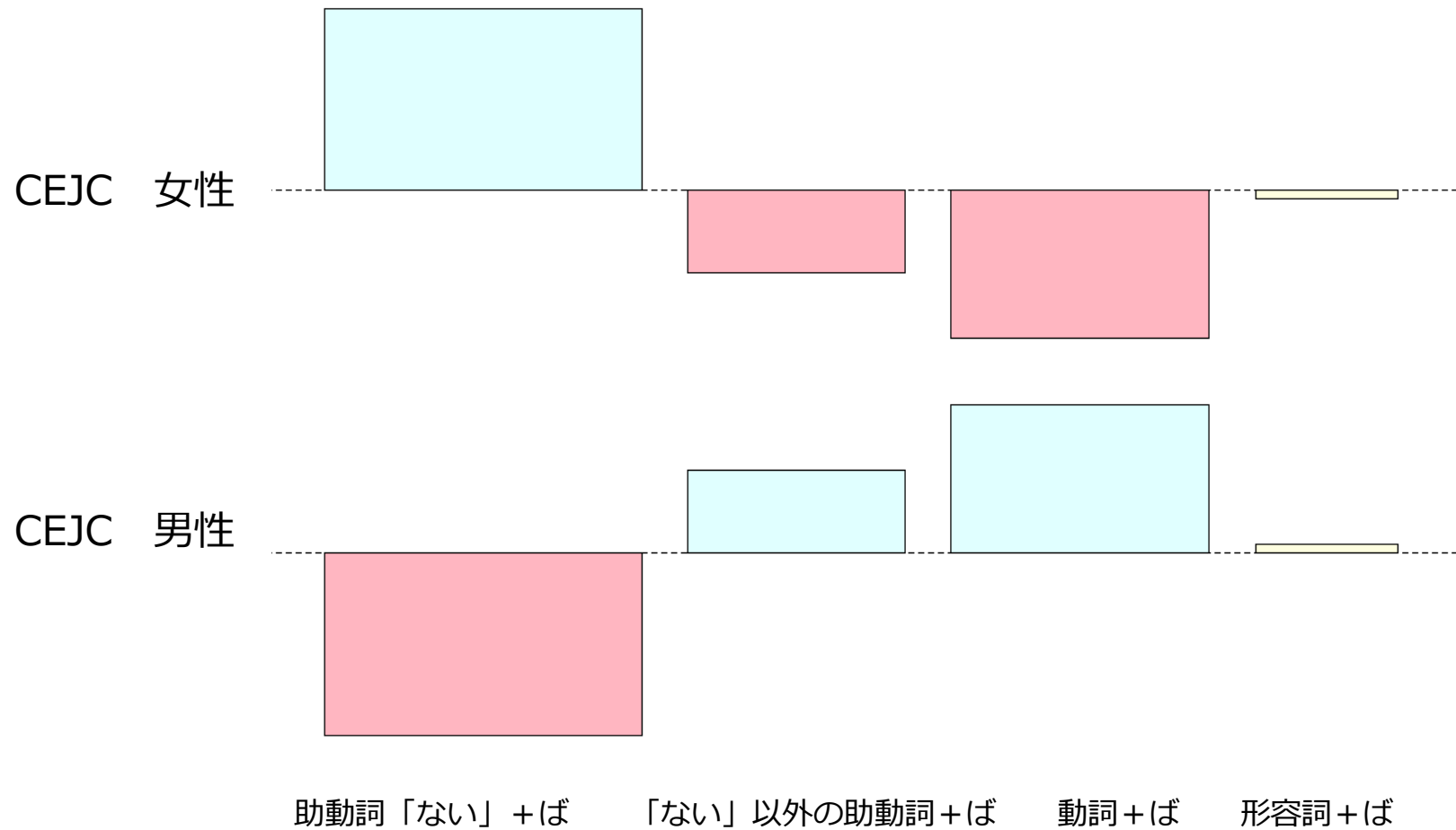
5.1.3 『名大C』における性差

data6 Adj.Res p= 0 , V= 0.257
mean = 0 , stdev = 5.21 , threshold = -1.96 1.96



5.1.4 『CEJC』における性差

data7 Adj.Res p= 0 , V= 0.325
mean = 0 , stdev = 4.3 , threshold = -1.96 1.96



5.1.5 まとめ

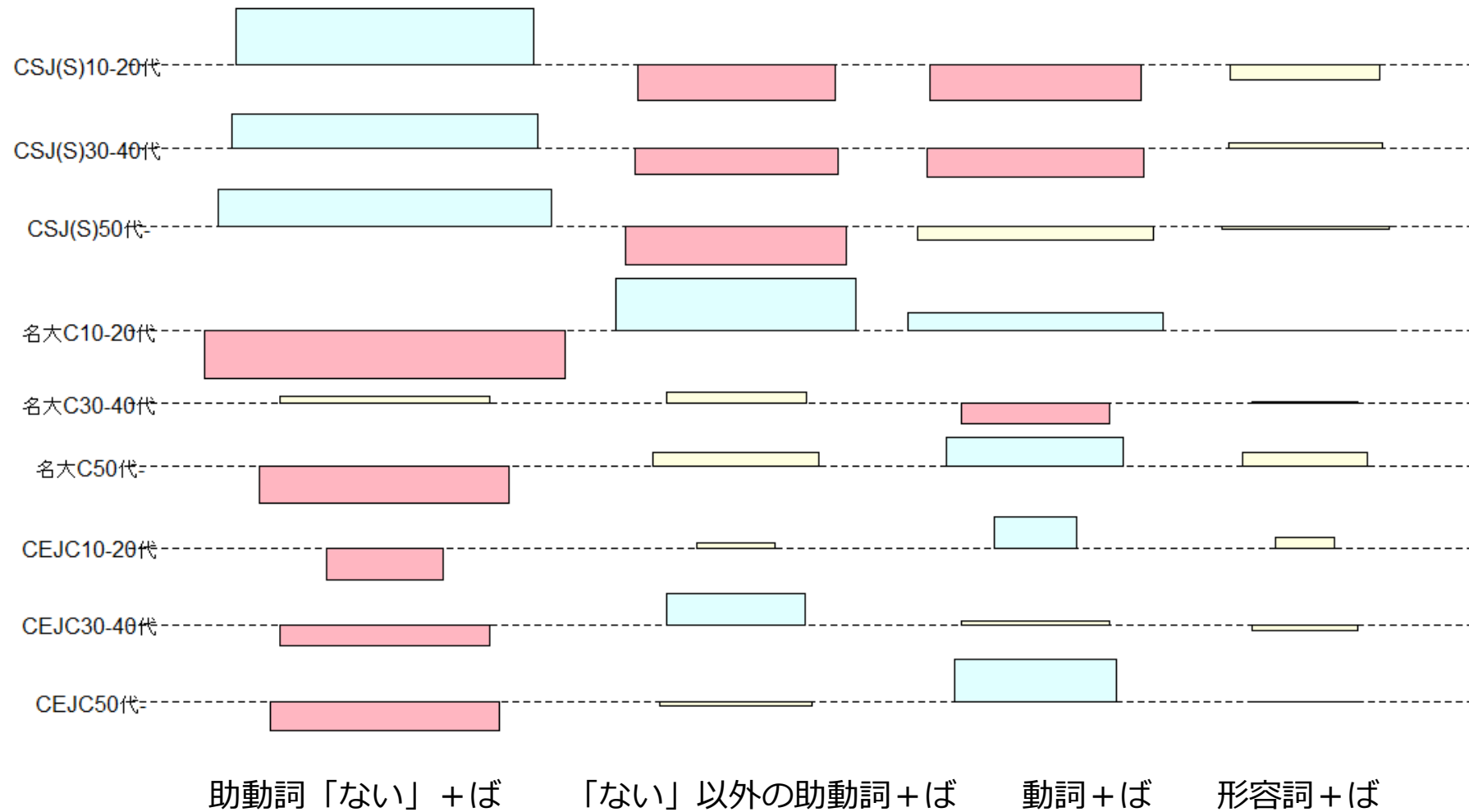
- コーパス間
- 独話中心の『CSJ』と、雑談や日常会話を集めた『名大C』『CEJC』では異なる特徴が見られる。『CSJ』では、男女とも助動詞『ない』の仮定形音融合をよく使用し、「ない以外の助動詞+ば」「動詞+ば」の音融合は使用しないが、『名大C』『CEJC』はその逆である
- コーパス別
- いずれのコーパスにおいても、助動詞「ない」仮定形音融合は女性が使用し、男性は使用しない。「ない」以外の助動詞仮定形、動詞仮定形音融合は男性が使用し、女性は使用しない



5.2 年代差

5.2 年代差

data Adj.Res p= 0 , V= 0.184
 mean = 0.06 , stdev = 3.52 , threshold = -1.96 1.96



5.2 年代差

- 独話中心の『CSJ』と、雑談や日常会話を集めた『名大C』『CEJC』では異なる特徴が見られる。『CSJ』では年代差が見られず、男女とも助動詞『ない』の仮定形音融合をよく使用し、「ない以外の助動詞+ば」「動詞+ば」の音融合は使用しない
- 動詞仮定形音融合は、『名大C』, 『CEJC』において、10-20代, 50代以上でよく使用される



5.3 生起率から見た音融合

5.3.1 生起率の求め方

- 仮定形で音融合を生じていない場合を考慮
- 生起率の求め方
- 名大C：女性
助動詞「ない」仮定形音融合
「なきゃ」の生起数 511例
助動詞「ない」仮定形一般
「なければ」の生起数 40例
- 生起率 = $511 \div (511 + 40) \times 100$
= 92.7%

5.3.2 各コーパスにおける音融合生起率

表6 各コーパスにおける音融合生起率

生起率	ない+ば	ない以外の助動詞+ば	動詞+ば	形容詞+ば
名大C女性	92.7%	1.8%	5.7%	38.1%
名大C男性	93.2%	4.3%	17.0%	47.4%
CEJC女性	91.4%	0.7%	3.3%	58.3%
CEJC男性	90.9%	2.9%	13.7%	41.7%
CSJ女性	46.0%	0.1%	0.2%	10.7%
CSJ男性	50.8%	0.7%	1.4%	9.7%

フォーマルな話し言葉での
生起率は低い

5.3.3 『CSJ』における音融合生起率

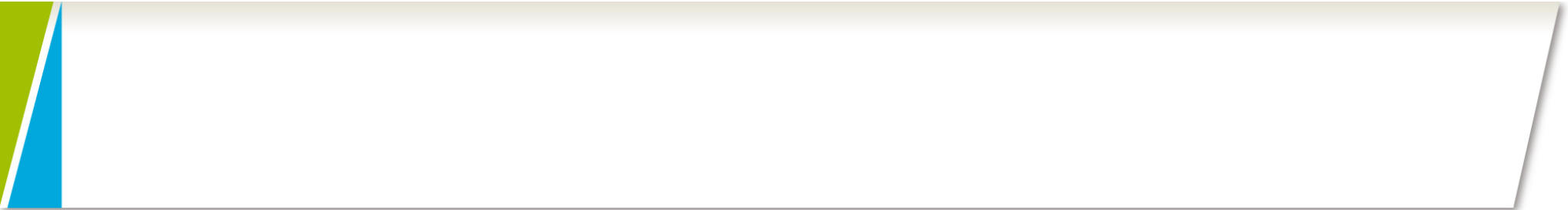
表7 『CSJ』におけるレジスター別音融合生起率

生起率	ない+ば	ない以外の助動詞+ば	動詞+ば	形容詞+ば
CSJ A(学会講演)-女性	13.4%	0.0%	0.3%	1.9%
CSJ A(学会講演)-男性	34.9%	0.6%	0.6%	4.6%
CSJ D(対話)-女性	69.0%	0.0%	0.0%	18.2%
CSJ D(対話)-男性	91.7%	0.9%	2.2%	40.0%
CSJ S(模擬講演)-女性	49.5%	0.1%	0.2%	13.7%
CSJ S(模擬講演)-男性	61.0%	0.7%	2.2%	16.1%

学会講演の生起率が最も低い

5.3.4 まとめ

- 助動詞「ない」仮定形音融合は高い生起率
- 『CSJ』の音融合生起率は他のコーパスより低い。
音融合を起こさない仮定形一般も多く使用される
 - フォーマルな場での音融合生起率は低い
 - 学会講演での生起率が最も低い
- 総じて、男性の方が音融合の生起率が高い



5.4 『CSJ』における講演別, 講演者別に見た音融合生起率

5.4.1 『CSJ』の講演別音融合生起率

表8 『CSJ』における講演別仮定形使用度数

	仮定形不使用	一般形のみ 使用	音融合使用	計
CSJ A (学会講演) -女性	30	133	10	173
CSJ A (学会講演) -男性	108	578	128	814
CSJ D (対話) -女性	2	18	9	29
CSJ D (対話) -男性	0	13	16	29
CSJ S (模擬講演) -女性	35	635	240	910
CSJ S (模擬講演) -男性	21	485	299	805
計	196	1862	702	2760

全講演の25.4%

5.4.2 『CSJ』の講演別音融合生起率

- 仮定形不使用の比率（講演数で割る）と音融合生起率

表9 『CSJ』における講演別仮定形不使用の比率と音融合生起率

	仮定形不使用 比率	性別仮定形不使用 比率（上段：女性 ／下段：男性）	生起率	性別音融合生 起率（上段： 女性／下段： 男性）
A（学会講演）	13.98%	17.34% 13.27%	16.25%	6.99% 18.13%
D（対話）	3.45%	6.90% 0.00%	44.64%	33.33% 55.17%
S（模擬講演）	3.27%	3.85% 2.61%	32.49%	27.43% 38.14%

5.4.3 『CSJ』の講演者別音融合生起率

- 一人の講演者が学会講演，模擬講演，対話と複数のレジスターで講演している場合

表10 『CSJ』における講演者別音融合生起率（女性）

講演者	性別・年代	講演数 (A/D/S)	学会 A (仮定形なし/仮定形一般/音融合の場合は生起率を示す)	対話 D (仮定形なし/仮定形一般/音融合の場合は生起率を示す)	模擬 S (仮定形なし/仮定形一般/音融合の場合は生起率を示す)
1	女性:65-69	3/4/1	1/2/0	0/2/0.26, 0.13	0/1/0
2	女性:70-74	2/4/1	0/2/0	1/1/0.06, 0.06	0/0/0.13
3	女性:70-74	1/4/1	1/0/0	0/2/0.15, 0.29	0/1/0
4	女性:70-74	2/4/1	2/0/0	1/3/0	0/1/0
5	女性:70-74	1/4/1	0/1/0	0/3/0.15	0/1/0

5.4.4 『CSJ』の講演者別音融合生起率

表11 『CSJ』における講演者別音融合生起率（男性）

講演者	性別・年代	講演数 (A/D/S)	学会 A (仮定形なし/仮定形一般/音融合の場合は生起率を示す)	対話 D (仮定形なし/仮定形一般/音融合の場合は生起率を示す)	模擬 S (仮定形なし/仮定形一般/音融合の場合は生起率を示す)
6	男性:45-49	3/4/1	0/1/0.13, 0.17	0/1/0.38, 0.11, 0.09	0/0/0.08
7	男性:55-59	7/4/1	0/2/0.13, 0.10, 0.13, 0.13, 0.05	0/2/0.83, 0.09	0/0/0.30
8	男性:65-69	1/4/1	0/1/0	0/3/0.2	0/1/0
9	男性:70-74	1/4/1	0/0/0.5	0/1/0.11, 0.38, 0.05	0/0/0.13
10	男性:78-79	2/4/1	2/0/0	0/1/0.10, 0.5, 0.38	0/0/0.17

5.4.5 まとめ (1/2)

- 全講演の25.4%が音融合を使用
→ 場面差・個人差が考えられる
- 学会講演では約14%の講演が仮定形を使用しない
- 学会講演, 模擬講演, 対話の順に音融合生起率は高くなる。

5.4.5 まとめ (2/2)

- 学会講演では、音融合を使用しない講演者も、模擬講演や対話では使用する。
 - 学会講演や模擬講演では、音融合を使用しない講演者も、対話では使用する。
 - 4番の女性講演者は音融合を全く使用しなかった。
- ※ 同一人物においても話す場面によって、音融合を使用するかどうか異なる



5.5 『CSJ』における音融合生 起率と印象評定

5.5.1 印象評定データ (1/2)

- 各講演がどのような印象を与えるかを記録したもので以下の2種類がある。(籠宮他「印象表データの概要」)
- 本発表では「単独評定データ」を用いる(前川 2004)

表12 印象評定データ

	単独評定データ	集合評定データ
対象講演	朗読以外のほぼ全ての講演	「コア」の独話のみ。各講演につき3箇所
評定者	各講演につき1名	男女比・年齢層を考慮した複数名
評定項目	評定語選択式項目 および段階式項目	尺度構成法に基づく心理尺度。 講演音声の評定および講演者の 性格推定

5.5.1 印象評定データ (2/2)

- 段階評定式印象評定の項目のうち、「講演の自発性」「発話スタイル」を使用した。「講演の自発性」は「原稿を読み上げているかどうか」を主な判断材料にしている。「原稿への依存度が低いほど自発性の評定値が高い」（前川 2004）

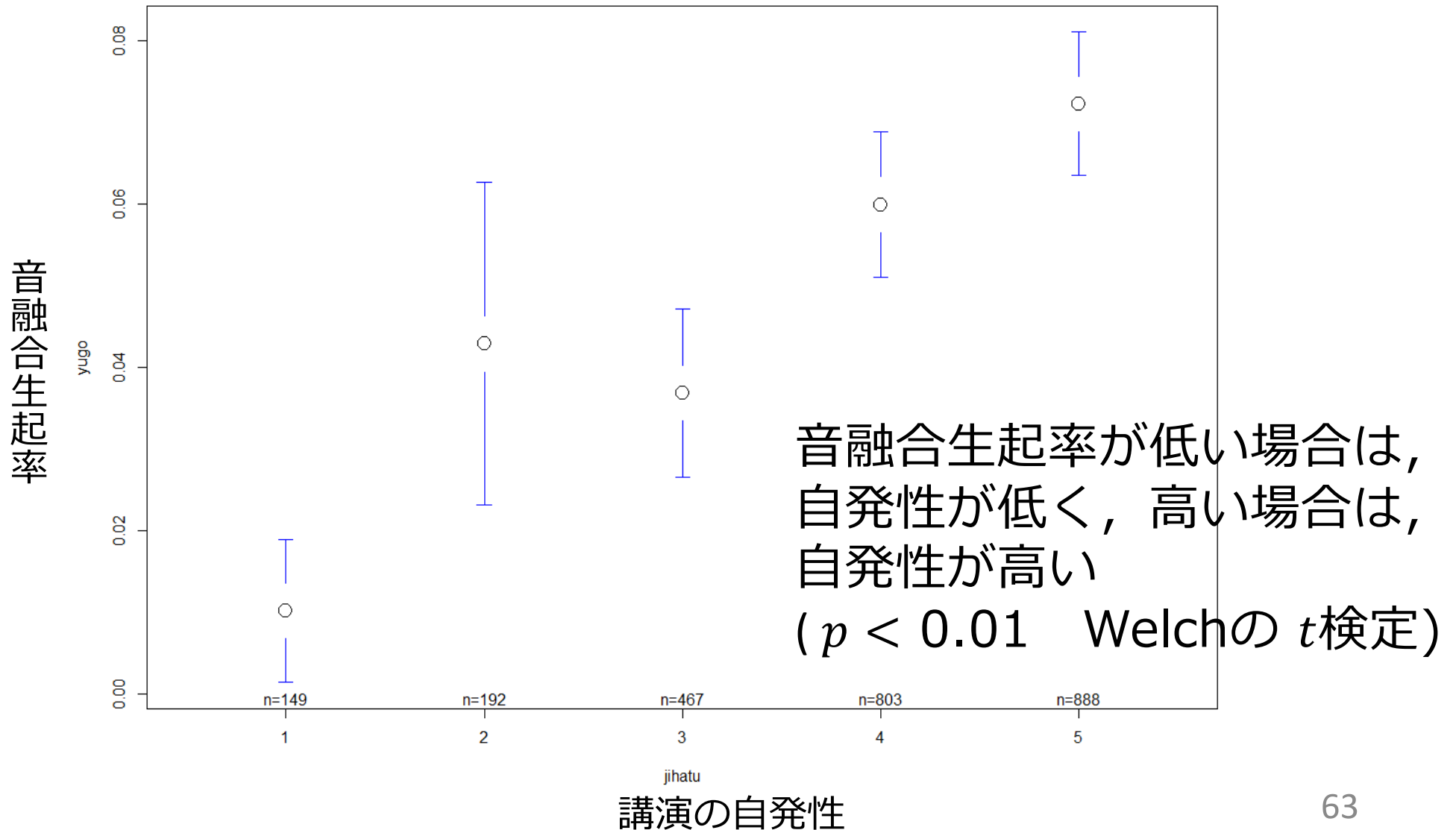
表13 段階評定式印象評定

	講演の自発性	発話スタイル
1	低い	くだけた
2	やや低い	ややくだけた
3	普通	普通
4	やや高い	ややあらたまった
5	高い	あらたまった

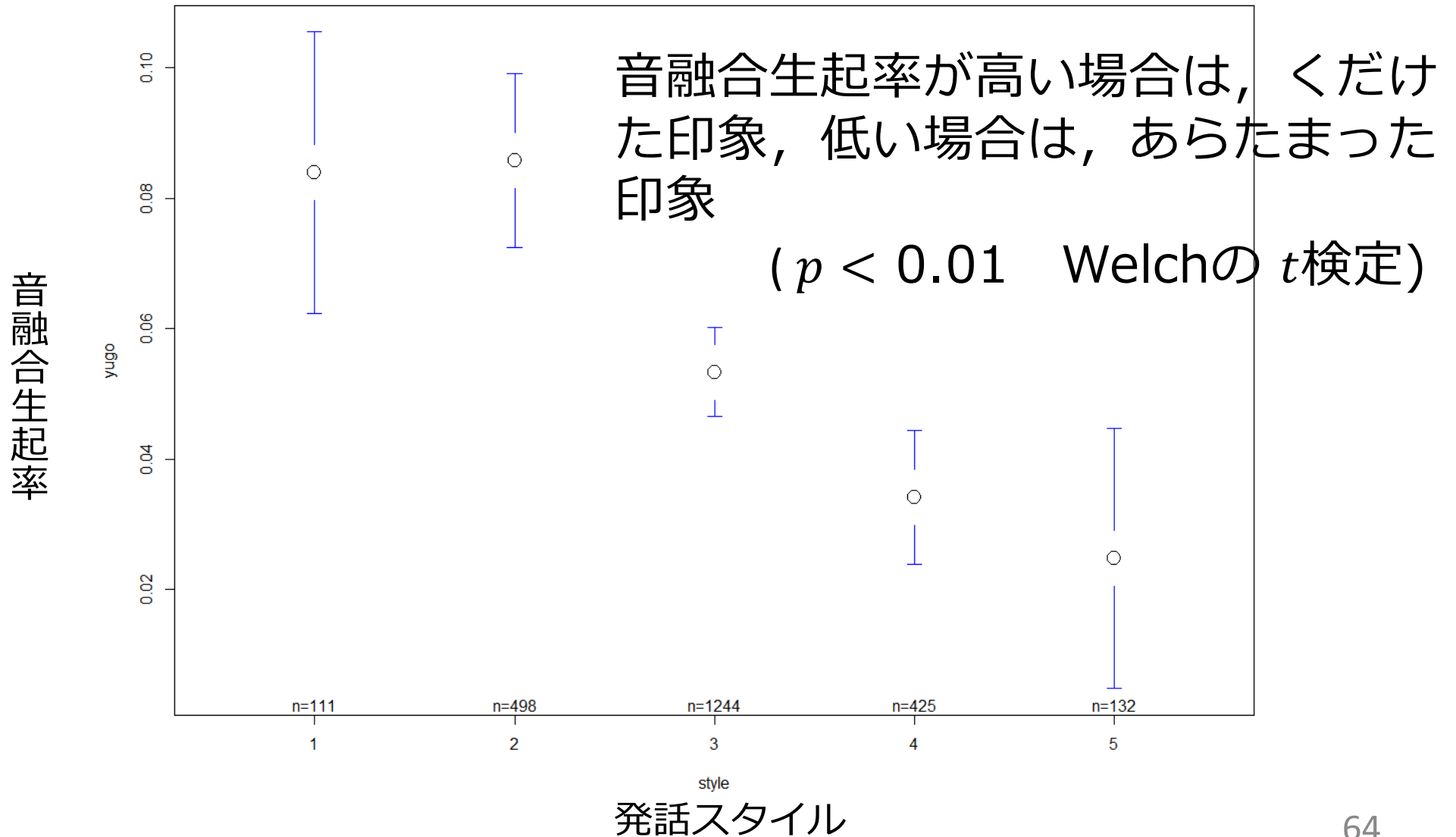
5.5.2 平均プロット

- 横軸に評定項目の段階 1 ~ 5, 縦軸に音融合生起率を示す
- 仮定形を使用していない講演, 評定がされていない講演を省いて分析
- ○は平均, エラーバーは, 95%の信頼区間を示す

5.5.2 講演の自発性



5.5.3 発話スタイル



5.5.4 まとめ

- 仮定形音融合生起率が低い場合は自発性が高く，高い場合は自発性が高い
 - 原稿やメモを見ずに，講演者自らの言葉で話す場合は音融合生起率が高くなる
- 仮定形音融合生起率が高い場合は，くだけた印象，低い場合はあらたまった印象をもつ
- 前川（2002）と同様の結果

6 おわりに (1/3)

- 音融合の使用状況について、コーパス間の違い、性差、年代差について述べた
- 独話中心の『CSJ』と雑談や日常会話を集めた『名大C』 『CEJC』は異なる特徴を持つ
- 『CSJ』では、男女とも助動詞『ない』の仮定形音融合をよく使用し、「ない以外の助動詞+ば」「動詞+ば」の音融合は使用しないが、『名大C』 『CEJC』はその逆である
 - フォーマルとインフォーマルの差
- コーパス別に見ると、いずれのコーパスにおいても、助動詞「ない」仮定形音融合は女性が使用し、男性は使用しない。「ない」以外の助動詞仮定形、動詞仮定形音融合は男性が使用し、女性は使用しない
 - 性差

6 おわりに (2/3)

- 音融合生起率を求めた
- 助動詞「ない」仮定形音融合は高い生起率
- 『CSJ』の音融合生起率は他のコーパスより低い
- 男性のほうが音融合生起率が高い

- 『CSJ』を用いて、場面別音融合の使い分けを分析
- 全講演の25.4%が音融合を使用 → 場面差・個人差
- 学会講演，模擬講演，対話の順に音融合生起率は高まる
- 同一人物でも場面によって、音融合を使用するかどうか異なることを指摘

6 おわりに (3/3)

- 『CSJ』の音融合生起率と印象評定項目「講演の自発性」「発話スタイル」の関連を確認
- 今後の課題
- 仮定形に後続する語に着目すること, 話者別・話し相手別に分析すること, 他の音融合, 方言を対象とすること
- 小説の会話文との比較

謝辞

- 本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究」（プロジェクトリーダー・小磯花絵）のデータを使用して行いました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- ボイクマン総子 (2010) 「丁寧体の会話における日本語母語話者の音声転訛」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』25: 17-35.
- 福島悦子・上原聡 (2004) 「丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察：日本語の母語話者と学習者の会話を比較して」『国際文化研究科論集』12: 121-130.
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏 (編) 『言語研究の技法：データの収集と分析』43-72. 東京：ひつじ書房
- 現代日本語研究会 (編) (2011) 『合本 女性のことば・男性のことば (職場編)』東京：ひつじ書房
- 堀口純子 (1989) 「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文藝言語研究. 言語篇』15: 99-121.
- 石井久雄 (1984) 『形態結合における音融合』文部省昭和58年度科学研究費補助金による奨励研究 (A) 形態結合における音融合の実態およびその生起条件に関する研究 研究報告書.
- 韓先熙 (1991) 「マンガに見る女子中高生の話しことば③縮約形について」『ことば』12: 72-83.
- 川瀬生郎 (1992) 「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』2: 1-24.
- 小磯花絵・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2017) 「『日本語日常会話コーパス』の構築」『言語処理学会第23回大会 発表論文集』775-778.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・西川賢哉・伝康晴 (2018) 「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版の概要」『言語資源活用ワークショップ2018発表論文集』483-492.
- 国立国語研究所編 (2006) 『日本語話し言葉コーパスの構築法』(国立国語研究所報告 124) 東京：国立国語研究所.
- 栗原幸則 (2000) 「現代日本語会話における特徴の一考察 縮約形, 談話形」『拓殖大学日本語紀要』10: 7-16.
- 前川喜久雄 (2002) 「『日本語話し言葉コーパス』を用いた言語変異研究」『音声研究』6(3): 48-59.
- 前川喜久雄 (2004) 「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15: 111-133.
- 丸山和香子 (1989) 「女性の話しことば：テレビのインタビュー番組から④縮約形について」『ことば』10: 63-84.
- 丸山和香子 (1990) 「男性の話しことば：女性の話しことばと比較して④縮約形について」『ことば』11: 51-60.

参考文献

- 嶺岸玲子 (1999) 「日本語学習者への縮約形指導のめやす—日本人による評価と使用率をふまえて—」『日本語教育』102: 30-39.
- 中村フサ子・小泉美礼・樽田ミエ子 (2003) 「テレビドラマの会話に見られる縮約形の調査・分析」『東海大学紀要. 留学生教育センター』23: 85-100.
- 中島悦子 (1993) 「話しことばに現れる世代差—縮約形について—」『ことば』14: 70-85.
- 小椋秀樹 (2006) 「第3章 形態論情報」国立国語研究所 (編) 『日本語話し言葉コーパスの構築法』(国立国語研究所報告 124) 133-186. 東京: 国立国語研究所.
- 岡田祥平 (2006) 「『縮約形』再考」『阪大日本語研究』18: 49-78.
- 斎藤純男 (1991) 「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』6: 89-97.
- 朱 春躍 (2000) 「自然会話における音素の添加, 縮減と融合」佐治圭三教授古希記念論文集編集委員会 (編) 『日本と中国ことばの梯 佐治圭三教授古希記念論文集』13-270. 東京: くろしお出版.
- 高橋朋美 (2012) 「日本語教育における縮約形の指導に関する一考察: 使用場面に着目して」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』13: 1-15.
- 田中弥生・柏野和佳子・角田ゆかり・伝康晴・小磯花絵 (2018) 「『日本語日常会話コーパス』の構築: 会話収録法に着目して」『国立国語研究所論集』14: 275-292.
- 立松喜久子 (1986) 「東京方言の『音便』を考える: 音韻脱落・縮約・交替・附加 (listening ability 向上のために)」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要』28: 33-58.
- 鄭 躍軍・金 明哲 (2011) 『社会調査データ解析』金 明哲 (編) 182-183. 東京: 共立出版
- 土岐哲 (1975) 「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28: 55-66.
- 土岐哲 (2002) 「日本語音声の縮約とリズム形式」玉村文郎 (編) 『日本語学と言語学』231-270. 東京: 三省堂.
- 上原聡・福島悦子 (2005) 「やっぱり, 丁寧に話しちゃいますんで: 丁寧体の会話におけるくだけた表現の使用」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育IV』61-72. 東京: くろしお出版.

参考URL

- 籠宮 隆之・山住 賢司・槇 洋一「印象評定データの概要Ver.2.1」
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/manu-f/impression.pdf
 - 国立国語研究所『大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究』
<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/>
 - 国立国語研究所『名大会話コーパス』
<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>
 - 国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス (CSJ) 』
https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/
- 注 * 5 名が学会講演と重複, ** 5 名が学会講演と重複, () 内の数字は学会講演もしくは模擬講演と重複